

論文の内容の要旨

論文題目：「談話標識」としての接続詞の機能
日華会話対照分析

氏 名： 林 淑 璋 (りん すーざん)

一、研究目的

本研究では、会話における「談話標識」としての接続詞の機能を解明する目的とする。また、日華の談話展開における「談話標識」使用の共通性と特徴の一端を明らかにすることである。

二、「談話標識」としての接続詞に関する研究の位置付けと解かれるべき問題点

先行研究を概観した結果により、「談話標識」と考えられる表現は、本来の文法カテゴリーを越えてさまざまなソースからなっていることが明らかになった。本研究は、「談話標識」の一つである「接続詞」という語群の分析および「談話標識」としての日華対照分析に適切な枠組みはまだ提示されていないという問題に注目した。日華の言語構造が大きく違い、形態自体を直接比較できないが、「接続詞」という語群は、人間の論理的な思考に關与する共通的な言語項目であるとも考えられるため、その「機能」の考察を前提とすることにした。接続詞を「談話標識」として研究するという位置付けを確認したことによって、二つの問いを設けることができる。一つは、日華両言語は言葉を使った思考の論理層では、前後の順序で提示される内容に何らかの関係があると自然に理解するような論理構造を持っているとされるが、論理関係を明示する言語表現は機能的に同じであるからであろうか。もう一つは、話し言葉にしか出現しない用法で、従来の書き言葉に挙げられた論理関係だけでは説明しきれないようなものは、何に由来するのだろうか。そして、日華の違いはどうなっているのだろうか、という問いである。

三、本研究の構成と分析の方法

本研究は、序章を含む八章から構成される。序章で本研究の動機、目的を述べ、二つの問いを提示する。第一章で対照分析に当たっての日華の「接続詞」の異同を挙げる。第二章で、談話標識としての「接続詞」に関する先行研究の知見や問題点を整理する。第三章で、本研究における分析の方法と理論的枠組を述べる。具体的には、「整合関係」(亀山 1999)、「話題関係」(南 1981)、「フィラーとしての用法」(山根 2002)といった三つの枠組み及び「聞き手情報配慮」(木村・森山 1997)・「情報を扱

う際に課せられる制約を守る義務」という観点に基づき、第四章で、日本語の「(それ)で」「だから」「じゃ」「でも」と、第五章で、それらの機能に対応するとされている、台湾華語の“然後”“所以”“那(麼)”“可是”を分析する。また、本研究は“那(麼)”を前件が確定なものか・独話型か・話し手の計算を明示するかという違いで“那(麼)1”と“那(麼)2”に分けて考察を行う。第六章では、第四章と第五章で得られた日華の「接続詞」の共通点と相違点をまとめる。終わりの第七章では、本研究のまとめと今後の課題を述べる。

四、分析と対照の結果

4.1. 整合関係：本研究は第四章と第五章で、整合関係の概念を基盤にして、先行研究に挙げられた諸機能を帰納的に検証した。結果として、日華両言語の表現はともに、書き言葉に見られた命題間の緊密な論理関係を示す用法から、話し言葉にしか観察されない語用論的な用法までであることが明らかになった。そして、各表現に付与されている特定の整合関係から多様な用法が導き出されるが、統一的に解釈できることが明らかになった。

時空的つながりを示す「(それ)で」・“然後”・“那(麼)1”：「時間以外の要素(空間や人物、もの等)を話し手の心理的順序で自由に提示する」ことができる。それによって、類似の事柄を列挙するほかに、「伝達したい事象のイメージを形成させるために、前件との接点を保持しながら後件で対照的な内容を導入する」という用法が観察された。

含意の因果関係を示す「だから」・“所以”：「聞き手にも埋め込むことができるはずの情報を導入する」という標識であることで、独話型で「聞き手にも分かるはずの情報の全体から一つの要素に焦点を当て、後件で提示する」という用法が観察された。また、対話型においては、「だから」には「発話の時点でそれ以上の情報を提供できないため既出情報を繰り返す」という「とりあえずの場しのぎ」用法(対話型)が観察され、台湾華語の“所以”には、情報提示手続きの制約が緩いことで、応答の冒頭で出現し「新規情報」を導入するといった用法が観察された。

含意の論証関係を示す「じゃ」・“那(麼)2”：「前件に基づいた計算による話し手の勝手な判断を示す」という標識であることで、独話型では「目に見えないはずの推論過程と結果を言語化させることで聞き手に分からせる」という用法と、対話型では相手との情報のやりとりが前提にあるため、「自分がこうして推論したから、このように判断をした」といった結果だけを聞き手に示し、結論の言語化というステップをスキップして次の発話の導入を予告する標識としての用法が観察された。

類似の否定関係を示す「でも」・“可是”：「前件から想定されたマイナス情報を後件で容認しながらもマイナスのものを軽減させる」という機能が明らかになった。それにより、対話型において、日本語の「でも」が「利点となるものを挙げて相手に行動の意欲を促し」たり「相手の自己否定に対して肯定的に評価し」たりして「相手のメンツを保つ」ために用いられていることに対して、台湾華語の“可是”は「行為や主張の妥当性を弁護し」たり、「相手の主張に対して控えめの評価をし」したりして「自分のメンツを保つ」という用法が目立つ。

以上の対照をまとめると、日本語は、相手情報配慮や「新規か既存か」という情報導入制約により談話標識の形式が選択されるほかに、情報導入の制約を利用することで言外のメッセージを伝えることができる。それに対して、台湾華語は独話型か対話型かに構わず、展開されるはずと予測した整合関係であれば、相手の情報を自分の判断につなげて述べるという用法が観察された。この観察により、華語の談話標識の使用においては、話し手の認識こそが基準となり、相手情報配慮と情報導入制約を守る義務は日本語より緩やかであることが明らかになった。

4.2. 話題関係：

日本語の四種類の接続詞が共通して以下の機能を持っている。直前の話題の情報に言及して、次の話題として展開させる。そして、それぞれ表現の示す整合関係によって、話題の展開方向が制限され、相手に予期させることができる。前出した話題の情報に再度言及することでとり戻すが、時間的にかなり遠く離れている話題の場合は、メタ言語と共起して、聞き手への注意を喚起する。新しい話題の導入あるいは話題終了といった談話の方向が大きく変化する場合は、唐突さを和らげるために、メタ言語と共起する義務が課されている。

台湾華語の四種類の「接続詞」は、基本的に日本語と同様に、話題を導入したり、とり戻したり、終了させたりする機能をもっている。違っているのは、遠く離れている話題をとり戻す際や大きな話題導入の際にメタ言語と共起せずに、単独で行うことができることである。それは台湾華語の「接続詞」は、いかに話題が中断していないように見せかけ、話の論理性を高めるためで用いられるからであり、メタ言語で談話の整合性が中断したことを宣告するのを避けようとするのである。日華の異同を話題回帰機能に限り、以下のような表にまとめた。

前後話題間の距離	日本語	台湾華語
近	談話標識単独使用可能	談話標識単独使用可能
遠	談話標識 + メタ言語(義務的付加)	

4.3. フィラーとしての用法：

本研究の分析結果により、日華の接続詞がフィラーとして使用されるかどうかは、計算を強いるかによって決まるものであるという原則は明らかになった。

もっとも自然な時空的なつながりの文脈で使われている「(それ)で」・“ 然後 ”・“ 那(麼)1 ”は後件に対する制約が緩いため、「思うことがうまい具合に浮かんでこない」時に、「次にまだ提供したい情報があるよ」という意思を相手に伝えることができる。因果関係を示す「だから」・“ 所以 ”は、後件に来るべきものは常識にかなうようなものであり、新たな計算を要求しない標識であるため、「知っているはずのことをうまく表現できない」時に、「それ以上によりよい表現をただいま検索中」という意思を表す。それに対して、「じゃ」・“ 那(麼)2 ”は話し手の勝手な判断が加わることを示し、「でも」・“ 可是 ”は「前件からの想定を却下せよ、後件で異なるものを導入する」と予告する標識であり、ともに話し手が意図した意味に決着するまでに計算を強いる文脈の中で用いられるので、フィラーとして認められないのである。台湾華語の接続詞は、日本語と違っているのは、相手の発話権を尊重するよりも積極的に会話に参加するのが協力的な態度と考えられることで、フィラーとしての発話権の維持力に違いが生じた。日華の異同を以下の表にまとめた。

計算を強いるか	日本語	台湾華語
強い ない標識	フィラーとしての使用 可能	
強い標識	フィラーとしての使用 不能	
発話権維持力	強	弱

五、総合的考察

以上の対照分析の結果により、日本語の「(それ)で」「だから」「じゃ」「でも」および華語の“ 然後 ”

“所以”“那(麼)”“可是”が話し言葉において共通的に「談話標識」として機能し、発話にとどまらず、より大きな言語単位で示すことができた。そして、「整合性を高める志向」・「情報を扱う際に課せられる制約を守る義務」・「会話に参加する姿勢」における日華の違いにより、これらの表現の使われ方に相違点が生じることが明らかになった。この結果を次の図で示す。

